

日本体育学会
体育哲学専門領域
会報
Vol.21(4), February, 2018

記事

- ♪ 巻頭言
- ♪ 体育哲学考
- ♪ 書籍紹介
- ♪ 私の研究
- ♪ 学会大会報告
- ♪ 事務局より
 - ・次回定例研究会について
 - ・来年度第1回定例研究会の発表者募集について
 - ・前号記事の訂正について
- ♪ 次号予告

巻頭言

運動に関する記憶

小林日出至郎（新潟大学）

一人ひとりの人間は、母から生まれる。その時、どこの場所で、いつの時間帯に、誰に支援されて生まれたのか、私の体験・経験としては、記憶として残っていることはない。また、人間にとって大切な二足歩行、この発端となる独り立ち、これについても誰かが写真として、映像として残していなければ、私自身について知ることはない。小学校の運動会については、ぼんやりとしたイメージがあるだけで、説明できる言葉は少ない状況である。山の中のグラウンドは一周すると、200メートル程を走る広さはあったように思う。フォークダンスをしたことも覚えている。小学校低学年の頃、休み時間に6年生と角力をとったこともあった。小さかった私は、必死に身体全体で相手の片足を捉えて倒そうとした。相手に負けたのか、勝ったのかについての記憶が無い。しかし、楽しかった。

大学の頃、長野県の菅平スキー場で、宿舎前のなだらかな斜面で直滑行と停止、プルーク、ターン等を教えてもらった。スキー板、ストック、ウェア等、どれも高校までのスキーとは全く異なる体験となった。傾斜、スピード、雪質等への慣れの大切さや、柔軟な膝や重力に対する姿勢の重要性に気づく時期のスキーは、よりスムーズな美しい滑りを求め、仲間と共に高め合っていたことを思い出す。小学校の頃、お寺の坂に積った雪を踏み固めて、およそ幅1メートル・長さ10メートル・斜度5度を、長靴と木の板で、何度も何度も滑った記憶とは異なる体験である。

今は、滑走日数も少ないが、スキー経験が少ない方々の指導に携わることがある。初級者の指導では、安全、安心、楽しい体験・経験等を意識する。斜面、状況に応じた技術指導、危険が生じない配慮、言葉遣い等、このようなイメージや言葉が、パソコンを前にする私のスキーについての記憶である。

そして、スキー指導をしていた時の、ふと意識した言葉があったことを思い出す。リフトから眺めたブナの枝の蕾を見た時のことである。志慶眞文雄氏の言葉である。

我が身に起こる いちいちの出来事が 私を照らす出来事 我が身に起こる全てが 私自身のいのちの内容だと そう受け取れる世界が開かれるとは予想だにできなかった 何という世界を賜ったのだろう

これらの言葉を自分から音声にしたわけではない。ただ、一瞬、実感したに過ぎない。それはスキー体験として、厳しい冬山で生きるいのちの凄さと、志慶眞氏のことばが結びついた事件として、私の中に記憶されている。

小林日出至郎 (hinode@ed.niigata-u.ac.jp)

二度目の体育哲学考執筆となりました。今回も何を書こうか迷いましたが、体育哲学の「研究」ではなく、「教育」について書こうと思います。

今年度までの6年間、母校静岡大学教育学部で、非常勤講師として「体育原理」を担当させて頂きました。受講生数は他学科履修者によって変動しますが、例年50名程度です。

私の講義のモデルは、自分が大学2年時に受講した新保先生の「体育原論」です。新保先生の「体育原論」は、出版直前の『身体教育を哲学する』をベースにしたものでしたので、私も『身体教育を哲学する』をベースに「体育原理」を構成しています（もちろん、『身体教育を哲学する』の著者で、大学院生時代の指導教官佐藤先生の講義は何度も受講したり、見学したりしました）。関係概念・実体概念の説明のところで、奥様のお名前を出されるお二人の指導教官にならって、私もそうしております。また、就職してからも、新保先生、愛教大の三原先生、至学館大の河野先生と年に何度か集まって、研究や教育について情報交換をしており、私の「体育原理」の講義内容は常にアップデートできていると自負しています。正直、自分が大学生の頃、ほとんど理解できなかった体育の超越性についてですが、今では体育実践の経験も20年を超え、さらに子育て経験も影響してか、最も熱く教えている内容のひとつになっています。

私の講義での工夫は、毎回、最後の15分間、受講生にミニレポートを書かせていることです。テーマは、その日の講義内容から出題し、例えば、「教育と教科の違いについて説明しなさい」「原理的体育と教科的体育についてそれぞれ説明しなさい」「『体育とは何か』を関係性の観点から説明しなさい」などです。このミニレポート実施の目的は、講義でのポイントを整理して、自分の言葉で記述させることです。また、付带的にですが、私が受講生の理解度を確認できるので、適切なフィードバックが可能です。さらに、毎回7点満点で採点し、その点数を積算して受講生に提示します。これは受講生のモチベーションをくすぐります。ミニレポート用紙はA4サイズですが、毎回びっしり書いて提出してきますし、「書き終わった人から静かに退出してよい」と言っているのですが、時間内に席を立つ人はほとんどいません。最近では、私の採点の腕もあがり、平均点は4点程度で、ほぼ正規分布しています。講義終了後には、ミニレポートを採点し、その結果を受けて「前回のまとめ」をパワーポイントに書き込み、次回の講義内容のパワーポイントを昨年のファイルを基にマイナーチェンジする。これが毎週のルーティンです。毎週、50枚程度のミニレポートを採点することは非常に時間も労力もかかりますし、「伝わってないな」と落ち込むことも多く、前向きにとらえられないこともあります。今の私の講義には必要なことだと思うので、継続しています。

現在、「体育原理」ではスポーツ哲学についてそれほど時間を割くことができていません。スポーツ構造論については、自分の研究「審判論」なども組み込んで3週にわたって話をしていますが、スポーツ倫理学やスポーツ美学についてはその内容や書籍を紹介する程度の扱いになっていることが今後の課題であると思っています。

私事で恐縮ですが、12年間勤務した常葉大学富士キャンパスはこの3月で完全撤退のため、4月からは静岡草薙キャンパス（←現在、建設中）勤務となります。移転後も学部所属は変わらず経営学部ですが、教育学部の授業もいくつか兼担することになっており、「体育原理」も担当します。講義で使用するパワーポイントは例年に比べて大幅な修正が必要となりますが、これからも体育教員を目指す受講生に「体育とは何か」を考えるきっかけを与えられるよう頑張ります。

この原稿執筆を引き受けるときに、すでに紹介したい書籍は決まっていた。広島で過ごした学部生時代に、はじめて「体育哲学」の世界へと誘ってくださった樋口 聡先生 (以下敬称略) 編著の標記の書籍である。この専門領域の会員の方々であれば、すでに読んでいる可能性は高かろうと思いつつ、また自身の能力不足は自覚しつつ、敢えて今現在の思いも含め、書かせていただくことにしたい。学校教育や体育という教科を専門とする方だけでなく、「教育」に関心のある方には是非紹介したい一冊である。

まえがきにおいて樋口は、「本書は、このところさまざまな学問分野で関心が持たれ、研究が進められようとしている『身体知』とは何かという問題設定のもとで、『身体知』研究の広がり」と可能性を展望するものである」と述べている。そして、その内容について、次のように説明している。

本書は、樋口が主任指導教員を務めた中国からの留学生、王水泉との共同作業の結果、形になった研究成果「教育における身体知の研究」(学位論文、広島大学、2011)をもとにし(第一章～第三章)、樋口の二つの論考(第四章、第五章)と、さらに釜崎 太の「ドレイファスの人工知能批判と身体教育」を加え(第六章)、「身体知」研究序説としてまとめたものである。

上記の中で、私自身の研究にかかわり、最も興味深く拝読したのは、「第五章 美術教育の哲学的基礎としてのアート教育—身体知研究の展開—」であった。樋口はいう。「制度の制約には大きいものがあるが、小さな取り組みがすでになされているのであり、制度の改革のためには、まず教師が意識を変え、安易な常識や慣習を疑い、教育実践内部からの変革への挑戦を積み重ねることこそが、大きな力となるだろう」と。教員養成大学という制度に翻弄されている一教員である私にとって、忘れられない一文となった。また、この文章には注がつけられており、「読み聞かせ (read-aloud)」について、「読み語り」と言うべきだとされている。この樋口の主張にかかわって、忘れられない思い出がある。今は高校生になった長女がまだ3歳くらいだった頃、冬の寒い日に娘を遊ばせながら夕食の支度をしていたときのこと。足元で娘が「ママ、ゆきがしんしんとふってきたね」と呟いた。「えっ? しんしんと雪が降ってきたなんてどこで覚えたの?」と驚く私に「ほいくえんのせんせいがよんでくれた『かさじぞう』にでてきたよ」と上越生まれの娘はにっこり笑って答えたのであった。娘が寝付いてから、自宅にもあった松谷みよ子・黒井 健の『かさじぞう (童心社)』を取り出してみると「しんしんとゆきがふりつづいて」とあり、雪が降り積もる景色が描かれていた。黒井 健氏は『ごんぎつね』で有名な新潟県出身の方である。その日まで関西で生まれ育った母親の私には“しんしんと雪が降る”感覚はなかった。母国語を学ぶこと、身につけることについて、深く考えさせられる出来事であった。「身体が物語に包摂されることによって生まれてくる知は、まさに身体知」なのである。

この原稿執筆の依頼があったのは、20年以上務めた教員養成大学の教員を退く覚悟を決めた翌日であった。次々に大学改革が進み、器用に変わりゆく周囲の中で、ふと立ち止まってしまおう自分に気づいたゆえの決断だった。学校教育学部、学校教育研究科の教員として、(再)課程認定の業務にかかわりながら、ビジョンのみえないカリキュラムの再編に疲れていたのかもしれない。だが、加藤泰樹先生から引き継いだ上越教育大学「体育哲学」の講義で、「『体育』は学校教育の中の一つの教科であるだけでなく、もっと広く深い人間の根源的な営みの名称なのである」と語る機会はない。

大橋 奈希左 (nagisa@juen.ac.jp)

旧約聖書に「ヨブ記」がある。神は悪魔と賭けをし、義人ヨブを、散々に打ちひしいだ。悪魔は、神がヨブを不幸な目に遭わせればヨブは神を呪う、と言った。神はヨブの沢山の子供を殺し財産を奪いヨブを病人にした。ヨブはそれでも神を呪わなかった。ただ、ヨブは神に訴えようとした。「何故、何故!?!」と。

ギリシア神話にプロメテウスという神の話がある。昔、人間は火を持たず洞穴に住み動物と同じ暮らしをしていた。プロメテウスは神の火を盗み人間に与えた。主神ゼウスは怒った。ゼウスは世の果ての岩山にプロメテウスを磔にした。ゼウスは驚をけしかけプロメテウスの肝臓を喰わせた。不死身のプロメテウスの腹は喰われた傷を一晩で治す。翌日また驚は彼の肝臓を喰う。それが何万年も続く。ゼウスの破滅する運命をプロメテウスは予知していた。ゼウスが破滅を避ける唯一の方法は、その破滅が何故起こるか、それをプロメテウスから聞く事だった。プロメテウスは沈黙しゼウスが生き残る方法を教えなかった。

ヨブやプロメテウスは何故、罰されないとならないか。悪いのは彼らより主神でないか。筆者は分からなかった。愛する事を考えた時この理由が分かった。

新約聖書でイエス・キリストは磔にされる時、彼を十字架に手首足首ごと釘で打ち付ける役人を前に「主よ、この者の罪をお赦してください。この者は自分が何をしているか、わかっていないのです。」と訴えた。これが本当に、愛するという事だろう。

神に「何故!?!」と詰め寄ったヨブ、沈黙を以ってゼウスを糾弾したプロメテウス、二人は本当の愛に届いていない。神やゼウスが悪でもそれさえ「主よ、彼をお赦してください」と赦してしまう、愛し抜いてしまう、母親が我が子にそうするように。それが本当の愛なのだろう。ヨブの神やゼウスは、彼らの愛が未だ本物でない、と罰したと筆者は考える。筆者の知る限り 18 世紀末-19 世紀始の英国の詩人シェリーだけが同意見である。

筆者は 2 回、修士課程に入学した。1 回目は教官と対立し退学する他無かった。2 回目の修士課程卒業後 10 年、筆者はどこにも就職・進学していない。1 回目の修士課程在学中から筆者は精神疾患の診断と投薬を受けている。主治医は「君は生涯、薬を飲み続けるべき」「その程度の障害を持つ人は多い」と言った。

悪い生徒を、叩き直す、その方法を筆者は知らない。叩く教育は筆者の流儀でないと思う。筆者は昔、今よりも悪だった。悪を以って筆者の悪を叩き直そうとしてくださった方々が居る。彼らはその直し方が最善と判断したのだろう。筆者はヨブやプロメテウスと同じく彼らに怒った。彼らを愛す・赦すと思ひ至らなかった。

修士課程卒業後 10 年、筆者は独りで研究を続けた。筆者は、「明日から教壇に立て」と何時言われても「はい」と答えられる自分を目指して、教育とは何か、どうやってやるのか、模索した。模索の仕方も結果も、永年、教職に就いた方の目には適わないか知れないが。

模索の中、ヨブやプロメテウスが何故、罰されなければならなかったか、筆者は気付いた。永く教壇に立てば、寂しい環境に育って悪に染まった生徒にも巡り会おう。その生徒を切り捨てず愛し何とか更生をと努力し続ける、その姿勢が筆者に必要な。神仏が居るなら筆者が本当の愛に気付いた事は彼らの贈り物か知れない。筆者はそれを未来の生徒たちへの贈り物にしたい。

筆者には永く一心に筆者を恋してくれた恋人が居る。人生を筆者の為に生きた老母も居る。筆者と恋人は四十歳を過ぎた。赤子の誕生は望めないか知れない。母は幼い子が大好きだが母が孫を抱く事は無いか知れない。やっと、教師として働く幾らかの準備が出来たと思う。己を教師に足ると思う者は教師に向かない。ただ、教育する自信の無い者は教師で居られない。何とか、小さくても暖かく幸せな家庭を作り恋人と母を幸せにする事。その為にも生徒たちが彼らの努力で幸せになる過程に付き添う事。それを願う。それを出来る自分づくりが筆者の研究と思う。ずっとそうだった。嘘でないと思う。

新緑が眩しかった夏が過ぎ、ドイツ最大のビール祭、オクトーバー・フェストの準備で慌ただしいミュンヘンの街で、2017年9月13~15日の3日間に第23回ドイツ・スポーツ科学会議(23. Sportwissenschaftlicher Hochschultag der Deutschen Vereinigung für Sportwissenschaft: dvs)が開催された。今年は、ミュンヘン工科大学(Technische Universität München: TUM)がホスト校を務め、“スポーツにおけるイノベーションとテクノロジー(Innovation und Technologie im Sport)”というテーマが設定された。



会場のTUMにて

日本からは日本体育学会の深代千之会長(東京大学)が、学会協定により招待を受け参加された。私は今年度在外研修でダルムシュタット工科大学に研究滞在していたため、深代会長とともに本学会に参加同行させていただいた。ここでは、ドイツでのスポーツ科学会議の様子を報告したい。

まず、本大会には、以下の7名の基調講演者がドイツの国内外から招待されていた。なお、大会中の司会進行等はドイツ語で進行されたが、海外からの演者の場合には、そのまま英語にスイッチされ行われた。

<基調講演>

Prof. Dr. Sigmund Loland シグムント・ローランド教授(ノルウェースポーツ科学大学:ノルウェー)
「Ethics and technology in Sport(スポーツにおける倫理とテクノロジー)」

Prof. Dr. Klaus Hurrelmann クラウス・ヒュレルマン教授(ヘルティ・スクール・オブ・ガバナンス:ドイツ)
「Jugend, Sport, Gesundheit - Innovative Impulse der Generationen Y und Z(若者, スポーツ, 健康: YとZの世代間イノベーション・インパルス)」

Prof. Dr. Heike Tiemann ハイケ・ティーマン教授(ライプツィヒ大学:ドイツ)
「Didaktik und Inklusion : Standpunkte - Kontroversen - Perspektive(教授法と含蓄:立場—対立—視点)」

Prof. Dr. Gordon Cheng ゴードン・チェン教授(ミュンヘン工科大学:ドイツ)
「Sensorimotor interaction in human and in robots(ヒトとロボットにおける感覚運動性の相互作用)」

Prof. Dr. Gabriele Wulf ガブリエル・ウルフ教授(ネバダ大学:アメリカ)
「Optimizing sport skill learning(スポーツ技能学習の最適化)」

Prof. Dr. Dr. h. c. Mark Tremblay マーク・トレンブレイ教授(オタワ大学:カナダ)
「Innovation, technology and childhood healthy active living: moving forward by looking back(イノベーション, テクノロジーと子どもの健康で活動的な生活:振り返って前進する)」

Prof. Dr. Dr. h. c. mult. Claude Bouchard クラウデ・ボークハード教授(ペンントン生物医学研究センター:アメリカ)
「What is the underlying biology of cardiorespiratory fitness, a powerful correlate of health?(健康との強力な相関関係にある心肺蘇生の基礎となる生物学は何か?)」

まずは、大会初日の基調講演のトップバッターとして、ノルウェーのシグムント・ローランド氏が登壇し、スポーツ倫理学の立場から「スポーツにおける倫理とテクノロジー」と題する講演を行った。その中で、ブレード・ランナーのオスカー・ピストリウス選手をめぐる倫理的課題についても議論されていた。ローランド氏は、ECSS(ヨーロッパスポーツ科学会議)の会長を

歴任し、IAPS(国際スポーツ哲学会)でもよく活躍され、馴染みのある研究者で、彼の講演は、私の研究意欲を駆り立てる刺激的な内容であった。

その他の基調講演の中で、非常に興味深かったのは、現在、ミュンヘン工科大学のロボット工学で教鞭をとられているゴードン・チェン氏の「ヒトとロボットにおける感覚運動性の相互作用」だった。京都でロボット工学を学んだというチェン氏のヒューマノイドを製作する実験工程が紹介され、ロボットの骨格と動きづくりだけでなく、さらにヒトに近づけるために、ヒトの皮膚の細胞のように、ロボットの皮膚の細胞を1枚1枚センサーで作成し、その細胞をつなぎ合わせる様子などが紹介された。ヒトだけでなく、ロボットも運動感覚を学習していくのだという様子が窺われた。

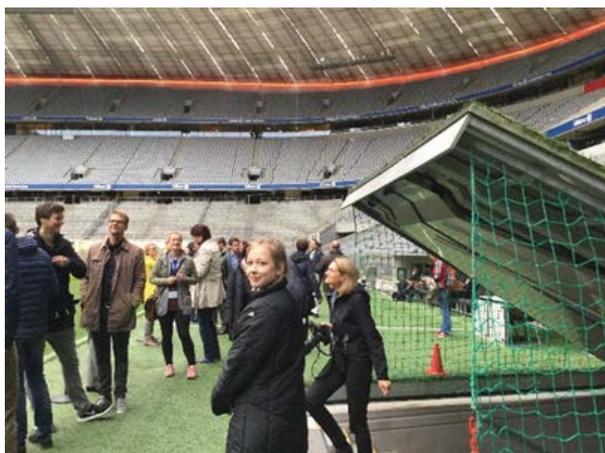
一般発表は11会場に分かれて、質疑応答を含めて1発表15~20分間隔で、ドイツ語で展開されていた。発表演題は、バイオメカニクスや運動生理、スポーツ哲学というような専門分野別の分科会ではなく、テーマやキーワードに従って横断的に51の分科会(ワークショップ)に分かれていた。今回の発表演題は315題であり、参加者数は1日に約500人余りで、3日間で約1,500人の参加であったと報告された。

最終日のパネルディスカッションでは、パラリンピックの金メダリストでブレード・ジャンパーのマルクス・レーム(Markus Rehm)選手を迎えて、「義足を通した利点の有無?!((K)ein Vorteil durch Prothese?!)」と題したパネルディスカッションが企画された。ここには、IAPSで活躍されているマイク・マクナミー(Mike McNamee)氏がコメンテーターとしてイギリスから駆けつけ、スポーツ倫理学の視点から、フェアネスやエンハンスメントの可能性について示唆していた。パネルディスカッションでも、一般発表の分科会と同様に、スポーツ哲学やバイオメカニクス、選手の立場など、まさに多面的に学際的な視点から現象を捉え議論しようとする様子がみてとれた。

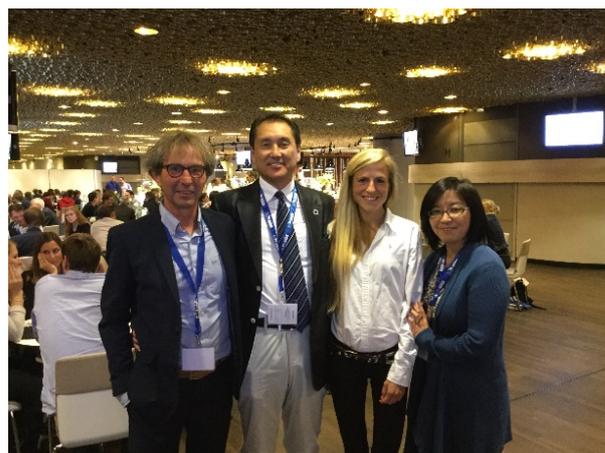
学会のスポーツプログラムとして、早朝7時から8時に、ヨガやECOを使ったイングリッシュ・ガーデンへのウォーキングなどが企画されていた。さらに、ミュンヘン・オリンピック記念公園に隣接するTUMのスポーツ科学部が設置されている大学施設見学なども企画されていた。

夜の情報交換会(懇親会)は、1日目はオープン参加でミュンヘン市内の巨大ビヤ・ホールで行われた。学会スタッフは、学会終了直後の週末から開催されるオクトーバー・フェストさながらの民族衣装で参加者を迎えた。男性はレダーホーゼと呼ばれる革のズボンを履き、女性は大きく胸の開いたブラウスに、腰の締まった独特のスカートをはいて、参加者を盛り上げていた。ドイツ各地から参加した学会員は、その場でミュンヘンのオクトーバー・フェストの雰囲気を楽しんでいるようだった。

2日目は学会の公式ディナーであり、学会表彰も含めたメイン・イベントとなっていた。その会場は、なんとFCバイエルン・ミュンヘンの本拠地・アリアンツ・アリーナ(サッカー・スタジアム)で行われた。参加者の入場口は、アリーナへの選手入場口を使用し、バスを降り



施設見学の風景



公式ディナー(中央左は日本体育学会・深代会長)

てそのまま直進すると、サッカー・フィールドへと繋がっていた。夜のライトアップされたフィールドに、地下のロッカールームから繋がる階段を上って立った瞬間には、なぜか鳥肌が立つ感じがした。フィールドと選手のベンチを体感した後は、そのまま、中央観客席の階段を上がって、おいしい夕食が待つレストランへと入っていった。もう秋風が冷たい、夜のスタジアムで学会パーティの開会が宣言された。

最後に、大会運営に関わっていた学生ボランティアの状況を報告しておきたい。学生ボランティアは、学部生から68名が選抜され、大会プログラムにも氏名が記載されていた。学生の仕事内容は、発表教室でのAV機器担当、大会受付、食事ケータリング、参加者の送迎、海外ゲストのアテンドなどが主なものであった。朝7時過ぎのケータリングから夜23時の送迎までフル回転で活動していた。特に、工科大学の学生らしく発表者のマイクや発表機器の設定など、全て1教室に1名配置された学生が行っていた。また、私たちのような海外ゲストのアテンドを担当してくれた学生は、常に流暢な英語で、とても親切で配慮のある対応がなされていた。大学内外での解説は、事前に準備されており、学生の質の高さに感動した。彼らは、夏季休暇中のボランティアでありながら、スポーツマネジメントの授業と連携し、実践力の単位評価につながる場だと話してくれた。

今回、日本体育学会・体育哲学専門領域からドイツ・スポーツ科学会議への参加者募集があり、私自身がドイツに滞在していたため手を挙げさせていた。そのご縁から、このような貴重な体験をさせていただいたことに心から感謝している。改めて、応募の段取りを早急に取り次いでくださった体育哲学専門領域の関係各位、並びに一般会員の参加を公募してくださった体育学会事務局の皆さんに感謝を申し上げて報告としたい。今年度のドイツ・スポーツ科学会議には、日本と中国の体育学会から招待参加があったが、今後も可能な限り継続していただきたい学术交流だと痛感した。

本当にありがとうございました。

小田佳子 (odak@tokaigakuen-u.ac.jp)

事務局より

定例研究会（次回発表要旨、来年度第1回の発表者募集）、前号記事の訂正を掲載しました。お問い合わせは、専門領域事務局担当（高岡英氣：bureau@pdpe.jp）までお願いします。

○次回定例研究会について

平成29年度第3回定例研究会を2018年3月3日（土）に下記の要領で開催いたします。なお、研究会終了後に懇親会を予定しております。会員の皆さま、ぜひともご参集ください。

- ・日 時：2018年3月3日（土）15：00～18：00
- ・会 場：〒112-0012 東京都文京区大塚 3-29-1
筑波大学 東京キャンパス
文京校舎 118 講義室
- ・アクセス：東京メトロ 丸の内線
茗荷谷駅下車（出口1）徒歩5分程度
- ・アクセスマップ：
http://www.tsukuba.ac.jp/access/bunkyo_campus.html
- ・発表の概要：
次ページをご覧ください。



【発表①】

学校における体罰概念の分類—有形力の行使との関係に着目して—

佐藤徳仁（筑波大学大学院）

体罰とは、長く議論されながらも未だに学校現場に残る大きな問題である。体罰議論においてその議論が続く原因の一つに、体罰という言葉の曖昧さがあるのではないだろうか。体罰として議論されているものが、教育として語られたり暴力として語られたり様々な内容で議論されている現状がある。そこで本研究では、文部科学省の通知や各論文を参考に体罰という言葉の意味を再度検討し、また学校という枠組みを加えることで、学校における体罰について分類を行うことを目的とする。それにより学校における体罰とは何かを明らかにしたい。

【発表②】

プラグマティック体育論 序説

神野周太郎（国士舘大学大学院）

今日、社会状況や教育課題を受けて、プラグマティズム再評価の動向がある。それと並行して、教育学領域ではデューイ哲学再評価が顕著である。その流れにあって、本研究の目的は、プラグマティズムとしてのデューイ哲学を、現在の視点から体育論的に検討し解釈することで、デューイ哲学の新たな姿を体育論的にあらわにすることである。それは、「プラグマティック体育」という新たな体育概念を提案する試みでもある。「人間が経験する」という根本的な原理から教育論を展開するデューイ哲学を、現在から解釈し直し、それに依りつつ体育論を展開することが、本研究の一貫したスタンスである。

【発表③】

オリンピックの平和構想に関する実践哲学—イマヌエル・カントの哲学を手掛かりとして—

野上玲子（日本体育大学大学院）

近代オリンピックは「平和な社会の推進を目指す」という国際的な使命を持って開催されている。しかしながら、オリンピックにおける「平和な社会の推進を目指す」という行為が休戦活動やフェアプレイなど多岐に渡って展開されていることから、その行為が何であるかが不明確だと言える。本研究では「オリンピックにおける平和とは何か」という根源的な問いを考察した上で、オリンピックの平和構想をカントの平和思想に依拠しながら原理的に明示することを目的とする。尚、本発表は博士学位論文として提出した内容に基づくものである。

【発表④】

コミュニティが所有するスポーツクラブの事業展開とソーシャル・エンタープライズ—FCユナイテッド・オブ・マンチェスターの経営資料に基づく考察—

張寿山（明治大学大学院）

コミュニティが所有するスポーツクラブとソーシャル・エンタープライズは同じ「コミュニティへ貢献する」という事業目的を持つ組織である。本発表は、ドウフルニによるソーシャル・エンタープライズの定義を、FCユナイテッド・オブ・マンチェスターの過去10年間の経営資料に基づく事業活動内容の分析に対して適用し、この共通点を明確に示した。さらに、コミュニティが所有するスポーツクラブは多種多様なソーシャル・エンタープライズを結びつける「インフラストラクチャー組織」として重要な役割を果たしうることを示し、その意義について考察する。

○来年度第1回定例研究会の発表者募集について

平成30年度第1回定例研究会については、日程を5月中下旬から6月上旬、会場を東京界隈で模索・検討中です。つきましては、平成30年度第1回定例研究会の発表者を募集いたします。発表を希望される会員の方は、定例研究会担当(阿部悟郎:gr-abe@tsc.u-tokai.ac.jp)と事務局(高岡英氣:bureau@pdpe.jp)にその旨、ご連絡願います。

なお、定例研究会の発表申込は、常時、承りますので、ご希望の際には運営委員会定例研究会担当・事務局へご連絡願います。よろしくお願い申し上げます。

○前号記事の訂正について

『会報』21(3)の木村はるみ氏「私の研究」(5頁、下から6行目)に誤植がありました。訂正して下さるようお願いいたします。

(誤)「鳥飛とび」⇒(正)「鳥飛び」

次号予告!

次号は研究情報などの内容でお届けする予定です。投稿をくださいます方は河野清司(konok@sgk.ac.jp)までお問い合わせください。

.....

体育哲学専門領域会報第21巻第4号

発行者 日本体育学会体育哲学専門領域
深澤浩洋(代表)
編集者 河野清司, 佐々木 究, 畑 孝幸(広報担当)
発行日 平成30年2月9日
連絡先 〒263-8588
千葉県千葉市稲毛区穴川 1-5-21
敬愛大学経済学部 高岡英氣 気付
電話: 043-251-6363(代表)

【編集後記】

日本各地で寒さがつづくなか、ホットな会報ができあがりました。巻頭言にある「運動の記憶」から発表要旨の「コミュニティが所有するスポーツクラブの事業展開」まで、多彩な内容になっています。主体である会員の執筆によって、現在の思考が会報に刻まれ、保存されます。その一方で、客体である会報は、さまざまな筆者の力を原動力にして多様な変化をみせつつ持続していきます。今年も体育・スポーツに関する思考や学会情報を会報という形式でお伝えしていきますので、お力添えをよろしくお願いいたします。(K)